

ぶらたなす

NO.6

長月

(ながつき)

長井高等学校

図書委員会

図書館

2024.9.18

読書の秋

新涼が気持ち良い季節になりました。みなさんは秋といったら何を思い浮かべますか。よく言われているのは、食欲の秋、芸術の秋、スポーツの秋、行楽の秋ですよね。その中でも私が始めに思い浮かべたのは読書の秋です。なぜ読書の秋と呼ばれているのかが気になったので調べてみました。由来は中国の唐時代の詩人韓愈が自分の息子に「秋は過ごしやすいので夜は明かりをつけて読書をするのに適している。」と読書を勧めた一節からきているそうです。期末試験や陸上競技大会など、まだまだ気が抜けませんが、読書をして心を落ち着かせてみてはどうでしょうか。

(1-1 図書委員)

図書委員のおすすめの本

『元気です、17歳。』

井上美由紀：著
ポプラ社

「私には美由紀さんの強さがわかりません。」女の子が質問します。それに対して「そんなことなぜ、気にするの。」と美由紀さんは答えました。美由紀さんは生まれつき目が見えない十七歳の女の子です。小さな頃から母のなんでも体験させるという育て方で成長してきました。もちろん、最初から何でもできたわけではありません。そこには様々な試練があったのです。

本書は考えさせられることが多くあり、更には誰でも努力すれば必ずなりたいたいものになれると元気づけてくれる本です。みなさんも、美由紀さんとお母さんとのケンカあり、感動ありの愛情たっぷりの生活を覗いてみてはいかがでしょうか。

(1-1 図書委員)

図書館長より

押忍！ 図書館長です。時の流れは早いもので、今年も9月の半ばを過ぎてしまった。それにちなんで、今回は、ピンのお笑い芸人・九月（くがつ）の処女作、『走る道化、浮かぶ日常』（祥伝社）を紹介しよう。

ジャンルはエッセイ。日本語だと「随想」、あるいは「随筆」。「随」は「したがーふ」「まにまーに」と読み、レ点を付けて、「想ひに随ふ」「筆の随に」。つまり、評論や小説とは違って、結構を拵えない、気ままな文章を指す。無論、全くの書き散らしであることはなく、評論家や小説家以上に、書き手にも読み手にも、知性と教養、そして感性が求められる。ちなみに、東京大学の国語の第四問（文系のみ）は、随想が出題される。勘弁してくれ。

さて、九月は、京都大学で教育学を修士課程まで修めた俊秀である。本人は、それが自身の個性であることを大らかに認めながら、その一点からのみ見られ、「なのに芸人をするんだから、君はつまり〇〇なんだよね？」などとしたり顔で決め付けられることを極端に嫌がる。彼が攻撃的なことばを用いるのはその時くらいで、普段は、実に思いやりに溢れた考察を（本人に文化人を、ましてや常識人を気取るつもりがさらさらなくとも、深い考察とは、自然とそうなるものなのではないだろうか）、「現代文の文法」で綴っている。

彼の文章の旋律は、鷲田清一や内田樹といった、受験頻出の思想家のそれとよく似ている（それでいて、彼らの文章のような「読みにくさ」は皆無だ）。恐らく、高校時代の九月は、彼らの文章を「愛読」していたのだろう。その読書体験が、彼の文体の、背骨とまでは言わずとも、肋骨くらいにはなっていると、私には感じられた。もし九月がこれを読んだら、「決め付けるな！ ばーか！」と憤るかも知れないが、感じてしまったものは仕方ない。

彼はXで「九月の『読む』ラジオ」という企画(@kugatsu_readio)」を展開している。興味が湧いた人は覗いてみるといい。惚れるよ。